健康通信

～小牧市民病院より～

血液のがんと診断されたとき

血液内科　医長
木原　里香

血液のがんは種類によって治療経過が異なります

白血病や悪性リンパ腫、多発性骨髄腫といった血液悪性腫瘍（血液がん）は分子標的療法や造血幹細胞移植などの治療法の進歩に伴い、以前と比較して、治療成績が向上しています。

急性白血病やアグレッシブリンパ腫に関しては、初回治療後、一定期間完全寛解を維持した場合に治癒したと考えます。しかし、低悪性度リンパ腫や多発性骨髄腫、慢性白血病に関しては、慎重な経過観察や治療の継続が必要となります。

低悪性度リンパ腫や多発性骨髄腫に対しては、治療を行うことのメリット・デメリットを総合的に判断しながら、治療方針を決定していく必要があります。

経済的な問題で困ったら

血液悪性腫瘍に対して、継続した治療が必要な場合には、治療費や就労などの経済的問題が発生することも度々です。

血液悪性腫瘍に限りませんが、がんと診断されても、治療を受けながら仕事を継続されている場合もあり、がんと診断されたからといって、慌てて退職しないことが重要です。

経済的問題でお困りの際には、当院の患者支援センターやがん相談支援センターにご相談ください。

思春期・若年成人が血液がんと診断されたら

血液悪性腫瘍と診断された場合、それぞれの年齢ごとに抱える問題は異なります。

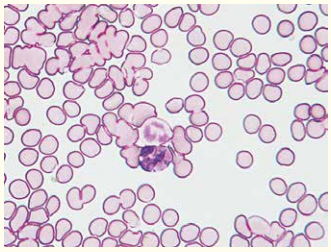
16から39歳の思春期・若年成人（Adolescent and Young Adult, AYA）世代のがん患者では病気の治療が生殖機能に与える影響や晩期合併症、通勤や通学に及ぼす影響などの他の世代にはない特有の課題があります。

「AYA世代のがんとくらしサポート」（https://plaza.umin.ac.jp/~aya-support/）というホームページで、療養についての情報や体験談が掲載されています。

ご高齢の方が血液がんと診断されたら

ご高齢の方では、疾患や治療、入院生活により、身体的な機能低下や認知機能の低下を来す場合があります。また、もともと認知機能が低下されていて、疾患や副作用を理解できなかったり、身体機能が低下されていたりする場合にはがんと診断されても、治療を行うことのデメリットの方が大きくなる場合もあり、治療の適応にあたっては慎重に判断していく必要があります。

疾患や治療により、身体機能や認知機能が低下された場合には、療養にあたり、地域の協力が必要となる場合があります。このため、外来、入院を通して、患者支援センターを通し、地域包括支援センターと連携して対応してまいります。



▲顕微鏡で見た血液（イメージ）

▲医師による問診（イメージ）

問合先　市民病院（☎76・4131）